

博士学位論文全文の要約文

論文題目：「復帰」への否（ノン）——戦後沖縄における統治と抵抗

序章

本論文は、戦後沖縄の「祖国復帰運動」を批判するなかで生まれた反復帰・反国家論の分析を軸に、「復帰」への抵抗の思想、文学、運動について考察することを目的としている。これまでの研究枠組みにおいて反復帰・反国家論研究は、この思想を唱導した新川明、川満信一、岡本恵徳の三者のテキストに限定される傾向があった。また、先行研究においては「復帰」への抵抗を反復帰・反国家論に代表・収斂させてしまうことで、沖縄／日本というナショナルな対抗関係が前景化され、同時期に沖縄で起きていた多様な領域における抵抗が不可視化されてしまっていた側面もある。本論文においても反復帰・反国家論の意義と可能性を探ることは重要なテーマの一つである。しかし本論文では、「復帰」と反復帰・反国家論を対置させて発展史的に戦後沖縄という時空間を叙述することは避け、「復帰」への抵抗を反復帰・反国家論のみに代表させることなく、戦後沖縄で同時多発的に起きていた様々な思想、文学、運動にも見出し、ナショナルな枠組みには収斂されない抵抗の複数性を描き出すことを目的とする。また抵抗について考察することは同時に、抵抗の宛先である権力の動態について分析する視座が要求される。よって本論文は、戦後沖縄における「復帰」への抵抗の複数性と、抵抗の可能性の条件となる権力の発動形態について、統治の観点から考察するものである。

本論文において「復帰」とは、反復帰論を唱導した新川明が述べているように、一九七二年の施政権返還をもって完了してしまう制度的な区切りのことではなく、沖縄の人びとが持っている本土思考と国家への同化主義のことである。ひと言で言うなら「復帰」思想とは国民化のことであり、ここに新川の反復帰論が「復帰」後もその命脈を失わないとされる理由がある。つまり現在において「復帰」化＝国民化が進行し続ける限り、国民国家への統合を個という単位において拒否を突き付けていく反復帰論はその思想的影響力を有し続けるというわけである。本論文においても、反復帰論の視座において「復帰」を日々の「復帰」化＝国民化という未了の事態として捉え、それへの抵抗が今なお現在性を持ち続けている思想的課題であるということを確認した。その上で、「復帰」への抵抗の複数性を示すために、戦後沖縄における「復帰」批判の契機とされる一九六八年の夏に行われた「沖縄にとって「本土」とは何か」と題された討論と、「復帰」後三〇年目に行われた「「復帰三〇年」を引き裂く」という討論を検討した。

前者の討論は、反復帰の思想の原点とも言うべき立論がなされた点で非常に重要な討論であったと言えるが、本論が同時に着目したのは、「復帰運動」に可能性を見出そうとしている側の発話の矛盾や分裂が引き起こすコンテクストの脱臼の効果についてである。そのような発話を発話者の意図に逆らって読むことで、「復帰」と「反復帰」という発展史的かつ二項対立的な構図に与することなく「復帰」批判の複数性を明らかにすることを目指し

た。討論では、伊礼孝、川満信一、中里友豪、真栄城啓介、嶺井政和の五名が、「復帰運動」に深く身を投じてきた立場から運動の論理を批判的に捉え返し、沖縄にとって「本土」とは何か、ひいては「国家」とは何かという問いをめぐる激論を交わしている。争点になったのは、主席公選に対していかなる姿勢を取るべきか、ということであった。主席公選は「復帰運動」にとってターニングポイントとなるものであり、これをどう位置づけるかが運動の評価に関わって問われたのである。「復帰運動」への認識の違いから対立軸は伊礼・中里・嶺井と川満・真栄城の間に引かれたが、なかでも伊礼と川満の意見の決裂は決定的だった。伊礼は革新共闘の屋良主席の実現によって「反本土・反米の抵抗政府たらしめる」ことを目指すと主張したが、川満信一は、「意識された棄権」を「一つの運動として展開してゆく」と述べ、拒否からはじまる政治の可能性について提言した。本論では、伊礼が国民人間中心主義の限界の内にもありながらも、シモーヌ・ヴェイユの祖国・国家観を沖縄の近現代史に接続させたことに着目し、ヴェイユの植民地主義批判の思想を照射し還流させることで、「復帰」言説の只中に国民主義批判や植民地主義批判の回路が生成されていたことを確認した。また中里が違和感や怒りという情動の発露とともに感受した「戦後」の不在と「戦争と戦争」の連続という感覚は、明確な「復帰」批判としては発話されなかったが、共同体の感性のあり方をフレーミングする「戦争の枠組」自体を枠づける批判的思考を展開しており、日本戦後史への統合を根源的に拒否する導線を戦後沖縄の言説に持ち込んだと言える。

二つ目に取り上げた新崎盛暉、宮城公子、屋嘉比収らが参加した沖縄の地域誌『けーし^{かじ}風』の特集「復帰三〇年」を引き裂く」という討論では、「復帰」ではなく「島ぐるみ闘争」を戦後の分岐点に据えることの重要性が主張されていた。これを受け、近年の沖縄戦後史研究領域では新崎盛暉による「島ぐるみ闘争」を中心とした歴史観が刷新され、沖縄戦後史像が再構築されていることを確認した。それらを踏まえ、本論文では「復帰」に抵抗するさまざまなレベルにおける出来事を偏在する分岐点として歴史化し、「島ぐるみ」という幻想をも解体しながら「復帰」を相対化し批判していくことを目的とすると述べた。

最後に本論文における「抵抗」について、要求や告発による共犯的な主体化を全的に拒否し、「復帰」化＝国民化に共死の「恐れ」を感知することによって共感の共同体から離脱することを志向するような抵抗であると定義した。その上で、抵抗の宛先である権力の様態について、戦後沖縄の米軍統治をミシェル・フーコーのいう統治性権力の一つの形態と見なすことで、人口として構成される領域を導く操行と、生きるに値しない生とされた者たちによる抵抗としての反操行を分析する視座を獲得することができると思う。以上、(一) 日々の「復帰」化＝国民化、(二) 「復帰」批判の複数性と「戦後」の不在／戦争の継続、(三) 「島ぐるみ」なき後の分岐点の偏在、(四) 米軍統治における統治性という四つの枠組みのもとで「復帰」を相対化し脱構築していくことが本論文の目的である。

第一章 主権を攪乱する統治

第一章では、戦後沖縄においてどのような権力の効果として国内にしながら「難民」が生産されていったのかという問いを出発点に、国民国家と主権の関係を問い直した。国民国家は主権をどのように放棄していくか、そして国家主権とは異なる権力によってどのように「難民」が再生産されているのかを明らかにするために、まず主権概念の形成について、エティエンヌ・バリバルによるカール・シュミットの批判的読解を参照し、それをジャック・デリダの主権論と結びつけて論じた。バリバルはシュミットを読解するにあたり、主に二つの論点を提示した。一つは二〇世紀前半の「ヨーロッパ内戦」という条件下で練り上げられたシュミットの主権理論と第二次世界大戦後の著書に関係づける必要である。二つめは、近代主権概念を確立したとされるジャン・ボダンのシュミットによる受容である。これら二つの論点の検討を通してバリバルは、民衆の主権と国家の主権はその起源と歴史からして軌を一にしており、国民国家という「ブラックボックス」を駆動させる二つの車輪であったと論じた。ジャック・デリダもまた、主権概念の形成をギリシャ神話にまで遡って検討した『ならず者たち』(二〇〇三)において、主権と民主主義の不可避的な結びつきと相克について論じている。バリバルとデリダの提起は、人民と主権の結びつきを性急に切断するのではなく、転移的運動を有する敵対関係や無条件性に基づく批判的な交渉を通じて国家の主権と対峙し続けることであった。次に近年シュミットの主権論を継承しながらそれをミシェル・フーコーの生政治の議論へと接続させることで主権権力の枠内において行使される暴力の問題を論じたジョルジョ・アガンベンを議論を論じた。アガンベンは「剥き出しの生」という例外の常態化として生政治を理解しているが、このような理解は生の全面的な領域に展開される生権力のミクロ物理学を捉え損ね、生政治を語りながら生の脱政治化を進行させかねない。それに対してジュディス・バトラーが批判するように、主権はもはや、追放された生がどっぷりと浸かっている権力の様態を説明するには不十分である。主権とは異なる統治形態によって追放された生は、脱政治化され無力化されているのではなく、追放の状態を強いられているまさにそのとき、まだ政治的なものの領域の内部にしながら抵抗しているのである。よって次に、主権とは異なる統治形態を見出すためにミシェル・フーコーの統治性について考察した。一九七八、七九年のコレージュ・ド・フランス講義でフーコーは、権力を法／主権モデルで思考することを退け、近代後期に特有の権力の動態について「統治性」という観点からアプローチを試みた。フーコーによれば、自由主義の統治は、個々の身体の規律というコストのかかる介入から撤退し、経済学の知に基礎づけられた市場をモデルとする人口＝社会の固有性と自然性に照準を定め、安全の諸装置を用いてリスクを管理することで、個々人とは異なる人口の水準における富、寿命、健康を効率よく最大化させることを企図している。本論文では、統治のあり方が国家理性 - ポリスの統治から自由主義の統治へと変容していったと論じるなかで、フーコーが間違いなく意識はしながら抑制的にしか語らない主題が植民地と帝国主義の問題であるとし、自由主義的統治が依然として国際世界とその外部の区分を維持し続ける帝國的原理の遺制によって可能になっていると論じた。

第二章 非国民になる思想——川満信一と新川明の反復帰・反国家論を読む

第二章では、反復帰・反国家論を中心的に展開してきた新川明と川満信一の議論を考察した。反復帰論とは、「核抜き・本土並み」を目指した祖国復帰運動の要求を決定的に裏切る形で沖縄の施政権返還が実現されることが明らかになっていた一九六〇年代末期、「復帰」運動が内在させていた日本への同化主義を徹底的に批判していくなかで生まれた思想といえる。その特徴は、非国民としての「個の位相」に立脚し、その主張を「反国家」にまで先鋭化させていった「思想性」にある。ここで「復帰」とはたんなる施政権返還という政治日程を指しているのではなく、国家へ身をのめりこませる「合一化」を意味しているので、たとえ施政権返還が貫徹されても、反復帰・反国家論の思想的有効性はまったく失われないと論者たちは考えていたが、「復帰」も「独立」も否定した反復帰・反国家論は長らく誤解されそして忘却されてきた。そうしたなか、一九九五年以降の社会状況に呼応するように反復帰・反国家論はいたるところで参照されだすようになる。一方で、新川らの反復帰論が依拠する沖縄の「異族」「異質性」というモチーフは、同時代の批評や先行研究によって多くの批判がなされてきた。本論もその視座を引き継ぎ、両者の反復帰論を批判的に再読したことで明らかになったのは、彼ら自身の議論のうちにナショナリズムを乗り越え批判する視点が含意されているということであった。その鍵となるのは、反復帰を主張する根拠としての「非国民」という主体ならざる主体である。それは川満にとっては「集団自決」を死に損ない、未来の死をカウントされている「死者的位相」にある者たちのことである。川満における「非国民の思想」とは、生者すなわち国民の内側へ死者の論理を転移させ、国家による支配と管理を永続的に否定していくことに賭けた企てのことであった。そして新川にとって「非国民の思想」とは、「反国家」や「非国民」の起点として「沖縄人」という主体を国家の鏡像として立ち上げているように見えながら、社会的に不可視化させられてきた者たちの間にアナキズムの思想を経由して獲得された「個の位相」という結節点を作り出していく過程が重要であった。すなわち、本論では日本人にも沖縄人にもなり損ねた者たちの間の社会的不正義を分節化する言説的实践として、新川における「個」を捉えなおした。「個」は「狂気」や国家を内側から腐食させる「壞疽」として表象される。新川がそのような矛盾や分裂を抱えた「個」について日本語というマジョリティの側の「貧しい言葉」で「語ること」は、マイナー文学的とも言うべき反国家の実践である。

第三章 非在と個人性の詩学——清田政信の詩と思想について

第三章では、『琉大文学』（一九五六年創刊）第一期の新川らの採用した社会主義リアリズムを徹底的に批判し、一九六〇年世代にシュルレアリスムに傾倒していった清田政信（『琉大文学』第二期）の詩と思想を考察した。清田に代表される一九六〇年世代は、『琉大文学』に所属しながらも一九六二年『詩・現実』を創刊して、アバンギャルド芸術としてのシュルレアリスムを再検討し、リアリズムの内的深化をはかろうとした。清田の詩的言語の実践が目指していたのは、「存在」とは異なる「非在」というイメージを表出することで

あった。清田にとってシュルレアリスムはいわば弁証法的に「美学化への傾斜」を上昇していくイメージを形成しており、そのようなイメージは「ヤク殺」される必要があった。そしてこの美学的なイメージの扼殺の涯に現れるのが「非在の世界」である。この「非在」のイメージを描いたのが詩「不在の女」である。「歩く」ことは清田の詩世界において重要なモチーフの一つであるが、不在の女の「眼の歩み」とは、歩行の反復からずれを生み出し、自己を追放しながら自らの視線を見つめ返す盲目的な視線へとまなざしを重ね、流動を呼び込む言葉や直喩の運動性を介することでセクシュアリティや諸主体や物の境界線を引き直し、フォームの崩壊や震え自体を「非在」のイメージとして肯定的に創出させる行為の戦略のことであったと考えられる。その後清田は六〇年代末心身の療養のため故郷の久米島に帰省していた間、詩を一切書いていなかった。三年の詩の絶筆を経て「復帰」前後に書かれまとめられた第三詩集『眠りの刑苦』は、失語や沈黙と向き合ったことで、日本語と沖縄方言の相互規定的な結びつきを切断していく詩的实践へと結実していった。さらに清田が同時期の詩論において理論化した「爽快な責任の論理」を内在化する「個人性」という概念について、「共同体の不在」のみを共有する非主体的な主体の場であり、久米島事件の「戦死者」たち（日本軍にもっとも寄り添い食料補給で協力した人々や、米軍を無血上陸させ非戦闘員を救おうとした中村渠明勇さんとその一家、朝鮮人 具仲会^{ク・チュンフエ}（谷川昇）さん一家ら）との連帯の場であったと位置づけた。

第四章 朝を待つ動物たちのテロル——清田政信の詩的言語における時間性

第四章では、引き続き清田政信の詩と思想を扱った。本章において課題となるのは清田における時間性についてである。清田の詩および詩論では、「朝」という時間が人や事物の形が溶解し変容し始める特権的な時間として設定されていた。清田の詩的言語における「遠い朝」とは、一九六〇年代初頭の沖縄で、主題を失い主体になり損ねた者たちが「オブジェ」へと変容を遂げ、「暗いエネルギー」と呼ばれる動物の感情にも似たネガティブな情動を鬱積させるしかない時間のことであった。またこの情動がオクシモロンやアレゴリーなどのレトリックを駆使して語られることによって、詩的言語は先行する記号との間にへだたりとしての時間性を本質的に有していることが明らかとなる。その意味において「朝」という時間は限りなく「遠い」のである。一方清田において昼は、目覚め覚醒している時間というより、「不眠」の持続として眠りが追放されてしまった時刻であり、伝達の言葉や論理や体系が支配している時間である。ゆえに清田が身を置こうとするのは、「夜」の「眠り」の時間に他ならない。こうした時間性への着目によって明らかになったことは、清田の詩的時実践が問うているのは、暗い情動や言語のアレゴリカルな時間性やグロテスクな形象を媒介に動物や死者たちの「帯域」へと歩み寄り、死を回避して生きていくことであった。清田の晦渋な詩的言語が手繰り寄せようとするこの思いがけないほど単純な——しかし決して容易でなない——願いは、「人間的なもの」に限られない生が生き延びること、ひいては「生存可能性の諸条件を再考すること」（バトラー）を私たちに促しているのである。

第五章 永続する死／詩——一九六〇年代琉大学生運動と中屋幸吉

第五章では、「祖国復帰」運動に極めて早い段階で批判を示し、「反復帰論的思想」を涵養していた琉大マルクス主義研究会とその活動の基盤になっていた琉大学生新聞部、そしてそれらに属して活動した後に自殺した中屋幸吉のテキストを考察した。本章では、遺稿集という形式のテキストを読むにあたり、一九五九年六月に起きた宮森小学校米軍墜落事件で亡くなった姪の死への不可避の回帰の時間を生き続け、生存の淵で「傷痕」を体内化していった中屋と同様に、「他者の痕跡」として中屋のテキストを読み、意味付けや共有の不可能な中屋の死を認知不可能なままに体内化していくことを試みた。そのために、復帰思想から反復帰論的思想へと向かう発展史観において中屋の思想を捉えるというよりはむしろ、革命と文学を志した青年たちの思想を当時の時代状況へと差し戻して再考することで、「政治と文学」が嵌入的に変容を遂げていく足跡を歴史化した。中屋が所属したマル研と新聞部の特徴は以下の四つに要約的できる。(一) 既成左翼＝日本共産党と一体化していった人民党からの離脱と復帰「運動」批判、(二) 米軍統治下における大学当局の検閲／監視への抵抗、(三) 日本本土の新左翼（共産主義者同盟＝ブント）への共鳴と理論的依拠（日帝自立論と行動的ラジカリズム）、(四) インターナショナリズムへの傾斜。「復帰」への批判は政治的運動としてよりも、中屋に見られるように個々の内面において深められていったと言える。そして中屋が自ら「思想の転機」と呼んでいる宮森小ジェット機墜落事件による姪の死に続き、憧れの「祖国日本」への四〇日間に及ぶ旅とそこでの日本への幻滅を「二度目の思想の転機」として位置付け、政治闘争に挫折していくなかで紡いだ詩の言葉に、主体の変容と新たな生への転生の可能性を見出した。中屋の遺稿集を読むことを通して読者は、自己を他者化し、心身を変成へとさらし、「傷」を生成することになる。このような経験は、未だ痕跡とすらならず、意識もされていない他者たちの傷を想像し、喪失を手放さず、悼まれてこなかった「予め喪われた死者」の喪に服し、メランコリーを拡大していくことともつながる実践である。

第六章 非人間化される基地従業員と「外国人」——阿嘉誠一郎『世の中や（ゆんなかや）』論

第六章では、米軍占領下における「外国人」問題を、施政権返還目前の沖縄を舞台に底辺労働者たちのストライキを描いた阿嘉誠一郎の小説『世の中や（ゆんなかや）』（一九七五年、同年文藝賞受賞）を取り上げ考察した。『世の中や』の文藝賞受賞は、会話文における沖縄方言の多用と当時の沖縄の状況や個々人の内面の描写が評価されたことによる。しかし、会話文には沖縄方言を配置する当時流行した形式は、そのカウンターとしての機能の一方で、ネイティブに期待される沖縄文学への役割（ローカリティーの表象）を自ら演出して見せ、言語の同一性を本質化して配置することで、日本—沖縄という諸ネイションをも「対一形象化の図式」（酒井直樹）に沿って想像的かつ実践的に立ち上げてしまう危うさに繋留されている。むしろ『世の中や』が重要であるのは、施政権返還目前の基地経済体制の変動におけ

る擬似的階級体制下の労働環境と、第四種雇用というストライキの権利も認められていない劣悪な労働環境で働く軍雇用員たち、そして「外国人」に焦点を当てたことで、従来米国—日本—沖縄という垂直的・対立的な構図で説明されてきた沖縄返還問題および米軍占領下沖縄の植民地状況を、底辺に生きる人々の視座から相対化して捉え直す作品であったからである。人種、ネイション、階級、ジェンダーの分断を描くことを通して、本作は、存在の底辺から人間性そのものを問い直す契機を与えるものであった。さらに本作は、はポストコロニアルな状況の現代の沖縄にも通じる労働力化と「民族」化の桎梏の乗り越えを、決して実体化された外部ではない「外部性」とも言うべき境界において志向し続けることで試みていると分析した。

終章

終章では、各章の総括と今後の展望を述べ、本論文では取り上げることでできなかった映像作品について、高嶺剛の作品に予備的に言及して論を閉じた。本論文の課題の第一は、主権権力から自由主義的な統治性権力への移行を理論的に跡づけることはできたが、今後はより具体的に事例や作品に即して戦後沖縄における統治性のあり方とそれへの抵抗を考察する必要がある。第二に、本論文では「復帰」への抵抗と米軍統治のあり方を主題とし考察したが、それだけでは十分に説明できない権力の様態を分析する必要がある。具体的には、被支配者側からの反応を「復帰」への抵抗として描き出し、権力の様態を統治性の観点から分析するだけでは、支配者の側の言説や表象については考察が不十分である。ゆえに、今後は一九九〇年代に隆盛したポストコロニアル理論を批判的に再検討する研究を踏まえ、植民者や支配者の側の身体や発話、情動、およびその表象なども分析の対象とする必要がある。三つ目は、本論文では戦後沖縄における映像作品について言及できなかった点である。今後研究を進めていく予定であるが、終章ではそのためのノートとして高嶺作品における音の自律と時間イメージについて論じた。高嶺は『オキナワン ドリーム ショー』（一九七四年）で「日本復帰」前後の沖縄の「風景の死臭」を嗅ぎ取り、風景の特権化を排してすべての風景をスローモーションの中で「等価性」に配置し直す作業を行なった後、次作の『オキナワン チルダイ』（一九七九年）では、「日本復帰」に象徴される「時計の時間とオキナワンタイムのせめぎ合いを風刺をこめて」描き出している。両作に通底しているのは、高嶺の「復帰へのいらだち」である。それは「復帰」という物語へ飲み込まれていく中で風景に意味が与えられ、「沖縄的なもの」が称揚されたり、逆に原日本のイメージが発見されたりするような、風景の序列化や特権化へのいらだちであり、またチルダイという独特の時間感覚が敷き均されてしまうことへの抵抗感でもある。終章では、高嶺の初期作品に風景の特権化や時間の均質化に抗う契機を探求し、「復帰」批判を行ったことの意義を分析した。